

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

2020.3

No.15



平和の絵—「戦争と平和」

20点連作—第17作

西村計雄 作

神木に包まれた幻のヤマネコたち

300号

176×274×6.5cm



〈制作意図〉 サキシマスオウの巨木が樹立する西表島・古見の三離御嶽。金色の木洩れ日に静かにささやく神さびた森。この自然の聖域に動物たちのやすらぎの世界がある。神々の守護のもと、原始の姿を残しているイリオモテヤマネコや世界最大の蛾・与那国蚕、セマルハコガメたちがたわむれる。このような破壊のない平和な悠久な自然をわれわれはいつまでも守らねばならない。

(昭和59年6月7日寄贈)

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、共和町立西村計雄記念美術館開館。

2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

公益財団法人沖縄協会主催講演会

「沖縄観光の現状と将来展望」

講師：下地芳郎

(二財)沖縄観光コンベンションビューロー会長



そして、新型コロナウイルス感染拡大の影響により国内外で旅行の控えが起きていることに対して、県民の皆さんに県内旅行の呼びかけを行うなどの対策を行っています。

(2) 沖縄観光の歴史

琉球王国時代の交流・貿易から始まった沖縄観光は、明治から昭和初期までの沖縄文化に関心が集まった時代を経て、米軍占領下の慰霊訪問とシヨツピングを中心とした観光へと移り、本土復帰後に開催された沖縄国際海洋博覧会を機にビーチリゾート観光へと変化していきます。

それぞれの時代の観光を考える専門書としては、笹森儀之助著「新南島探験」、島袋源一郎著「新版沖縄案内」、渡久地政夫著「どうする！沖縄観光」、宮里定三顕彰事業実行委員会著「沖縄観光の父 宮里定三」など多くの名著があります。

(3) 沖縄観光の現状と課題

2012年以降、LCCの普及、大型クルーズ船の寄港増加で入域観光客数を順調に伸ばしていましたが、今般の韓国や中国に関係する諸問題が原因で現場が動揺している状況です。しかし、「行政や企業が作る観光」から、「観光客が沖縄を評価することで作る観光」の時代となり、今後は観光目的だけでなく仕事のために滞在することも含めた多様な「ステイネーション・マネジメント」に着目していきたいと思えます。

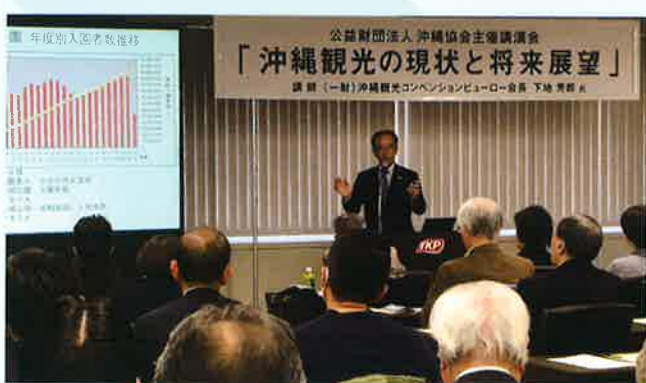
(4) これからの沖縄観光にとって重要な5つのピックス

- ① インフラ整備
那覇空港第2滑走路が完成し、県内クルーズ拠点那覇・中城・本部・平良、石垣の5港へ拡大します。他の地域とどのように差別化を図っていくかが課題です。
- ② SDGsと観光
沖縄観光業界においても「持続可能な開発目標」が提案されるなど、SDGsへの取組が始まっています。今後は、沖縄観光を評価する為の新たな指標が必要です。
- ③ 世界自然遺産登録
西表島は今年の夏の世界自然遺産登録を目指しており、沖縄県は西表島に入る観光客数を年間33万人に制限する方針を決めました。制限に強制力がないので、どのようにルールを構築していくかが注目されています。
- ④ 観光目的税(宿泊税)
沖縄県では観光目的税を導入して観光振興を図る為の安定的な財源を確保するといことが議論されていますが、1. 宿泊税免除除点の設定、2. 離島住民の負担軽減、3. 使途と管理体制という点においてまだ検討が必要で、OCVBでも業界との意見交換を通じて早期の導入を目指したいと考えています。
- ⑤ 宿泊施設供給過多対応
2020年の第2滑走路完成を見越してホテルの供給量が伸びている中、観光客数の伸び率が落ちていて、この二つのバランスにずれが生

じ、宿泊施設の稼働率が下がっています。将来に対して冷静なシナリオを描いて、第2滑走路を生かす努力をしていく必要があるでしょう。

最後に「目指すべき観光のかたち」をお話しします。

観光の基本は「住んでよし・訪れてよし」といわれますが、私は「受けてよし」を加えて三方よしとしています。住んでよい沖縄、訪れて満足できる沖縄、地域として受け入れて観光の効果がしっかり出せるということを目指していきたいと考えています。



※2020年2月8日に開催した沖縄協会主催講演会の内容となります。

協会関係事業他 募集案内

★沖縄青少年勉学支援制度

INCSN

本制度は、本土(沖縄県以外の都道府県)で働きながら学ぶ沖縄青少年を支援し奨励するため、1973年に設置された。本制度に賛同いただいた沖縄県出身者を含む多くの方々からの寄附金で作られた「働きながら学ぶ沖縄青少年支援基金」の運用により勉学支援金を給付しており、返済義務を要しない。

応募資格は本土において働きながら学ぶ沖縄県出身者で、次の(1)～(4)のいずれにも該当する者。

- (1) 25歳以下の者
- (2) 専修学校及び各種学校、通信教育を行う教育施設等に在学している者
- (3) 勤労収入により生計を維持している者
- (4) 保護者が沖縄県内に居住している者

2020年度の応募は4月1日から6月30日まで。当日消印有効。

※詳細は、「公益財団法人沖縄協会のホームページより」

★沖縄平和祈念堂改修工事に伴う

「寄付のお願い」

開堂から42年を迎える沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻りに実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様にご経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

※詳細は、「公益財団法人沖縄協会のホームページより」

昨年10月31日に発生した首里城火災は、沖縄県内のみならず、国内外にも大きな衝撃を与えました。私は沖縄観光コンベンションビューロー(以下、OCVB)の立場として10月31日早朝から本日に至るまで対策にあたっております。

(1) 最新トピックス

首里城火災後の現状ですが、火災原因が特定されない中、首里城公園内の公開エリアは徐々に広がっています。首里城再建に向けて沖縄総合事務局の中に技術検討委員会(委員長・琉球大学名誉教授 高良倉吉氏)が立ち上がり、沖縄県においては首里城復興有識者会議がスタートし、昨年12月26日、基本的な考え方が作成されました。

OCVBでは「ゆみがえれ 首里城」というキャッチコピーとロゴマークを作成し、ホームページ上で公開しています。ダウンロードしてお使いいただけますので是非ご利用くださいと思います。また、首里城正殿の火災現場に焼け残った大龍柱を適正な場所に移設して補修し、首里城の歴史・文化を紹介する場所として活用してほしいと思います。火災は悲しい出来事でしたが、この状況を見てもらうことでスタートというふう、ということも多くの方々と意見が致つています。

第41回沖縄研究奨励賞受賞記念講演

沖縄協会は、令和2年1月23日「第41回沖縄研究奨励賞贈呈式」を開催した。今回受賞した自然科学部門の富永篤琉球大学教育学部准教授、西辻光希沖縄科学技術大学院大学マリンゲノミクスユニット研究員・有本飛鳥広島大学大学院統合生命科学研究所附属臨海実験所助教(共同研究)、社会科学部門の山本章子琉球大学人文社会学部国際法政学科講師による受賞記念講演の要旨を紹介する。

琉球列島の両生類の起源と多様性

富永 篤
琉球大学教育学部
准教授



沖縄を含む琉球列島は、過去にユーラシア大陸の一部であった地域が切り離されて島になった大陸島である。その証拠の一つとして、琉球列島には一般には海を渡ることのできないとされる両生類が数多く分布することがあげられる。現在、琉球列島には、全部で27種の在来両生類がいるが、そのうちの21種がこの地域の固有種であり、その独自性の高い両生類相の形成には、この列島の形成過程が深く影響したと島の両生類の多様性の実態把握や多様化プロセスを探究するために、各種についての生物地理学的研究を遺伝学的に進めてきた。その結果、琉球列島の両生類は、他地域の近縁種とは遺伝的に非常に大きく分化しており、さらに琉球列島の同種の異なる島の集団間にも大きな遺伝的な分化がみられることが明らかになった。奄美と沖縄に分布するシリケンイモリは、諸島間の分化が大きく、その推定分化年代は500万年前で、両集団の遺伝的な違いは他の動物の別種間の違いに相当するほどに大きいことを明らかにした。ホルストガエルの研究では、沖縄島と渡嘉敷の集団の遺伝的な独自性が示され、最終氷期に沖縄島と渡嘉敷島が接続した際にも、沖縄島北部の集団と渡嘉敷島の集団には、遺伝的な交流が生じず、その分化が維持されてきたことが明らかとなった。トカラ列島から台湾までの広域に分布するリュウキュウカジカガエルの研究では、奄美、沖縄島、八重山間の分化が非常に大きいことが分かった。一方で、トカラ列島と奄美大島の集団間の分化は非常に小さく、両生類としては例外的にこのカエルが何らかの方法で海を渡って分布を奄美からトカラ列島まで広げることが明らかとなった。ヒメアマガエルの研究では、琉球列島の集団は、奄美、沖縄、宮古、八重山の4遺伝系統に大別され、中でも八重山の集団は、他の琉球の集団よりもむしろユーラシア大陸内陸部の別種と近縁であることが明らかとなった。これらの研究により、琉球列島が島嶼化したことにより、この地域の両生類の多様性と独自性が維持され、または育まれてきたらしいことが明らかとなった。

沖縄特産海藻のゲノム研究 ～モズク・海ぶどうを用いて～

西辻 光希(代表) 学
沖縄科学技術大学院大学
マリンゲノミクスユニット
研究員



ゲノムとは「生命体の持つ遺伝子全て」であり、地球上のすべての生物はそれぞれ独自のゲノムを持つ。現在までに20万種以上の生物ゲノムが解読されている一方、海藻類のゲノム解読は困難なためわずか9種に限られている。我々は各障害を克服する手法を開発し、地元漁業関係者の協力を受けることにより、モズク類2種と海ブドウのゲノム解読に成功した。

日本で流通している約95%が沖縄で養殖されている褐藻モズク類(オキナワモズク、イトモズク)は機能性多糖フコイダンを特に豊富に含んでいる。本研究によりモズク類のゲノムは比較的小さく、フコイダ合成に関与する2つの遺伝子がモズク類では融合し、1つの遺伝子となっていることが明らかになった。この結果により、フカメ、コンブといった他の褐藻と比べてモズク類は効率よくフコイダンを合成しているということが示唆された。さらにイトモズクではもう1組の融合遺伝子が見つかったことから、それぞれの進化過程に獲得した遺伝子群を用いて特徴的なフコイダンを合成していることが示唆された。

大型の多核単細胞性の緑藻の海ブドウ(標準和名クビレズタ)は、独特の食感を持つ人気が高い沖縄特産の海藻である。本研究により、海ブドウのゲノムは養殖栽培されている農水産物の中で最小クラスであることが明らかになった。陸上植物と共通の遺伝子も見つかり、プチプチの部分では光合成や植物ホルモンなど成長に関わる遺伝子群が多く検出された。これらの結果は、海ブドウは単細胞生物であるものの、遺伝子をうまく使い分けて、独特の形状を作るだけでなく各部位の機能も異なっていることが示唆された。

本研究の成果は水産業への応用も十分に可能である。例えば地域ごとの特異性も明らかになりつつあり、ゲノムが小さいことを活かした品種改良が実現できる可能性がある。現在はそのための研究にも着手しつつある。これからは基礎研究者と沖縄県、さらに漁業関係者と緊密な協力を続けて、研究を進めていきたいと考えている。

沖縄で安全保障を研究する意味

山本 章子
琉球大学人文社会学部
国際法政学科講師



出版社勤務の傍ら博士課程に入り、日本学術振興会特別研究員(DC2)に採用されて退職。ほどなく夫の沖縄着任が決まって共に移り住もうとしたら、当時の指導教官が反対した。東京にいないと研究はできないという。実際には、沖縄の方が研究環境は充実している。全米の沖縄関連史料を集めた沖縄県公文書館があり、県内の各大学図書館が収蔵する文献や資料集も豊富だ。故・宮里政玄先生と我部政明先生が主催され、故・新崎盛暉先生も参加されていた研究会で受ける刺激は他では得られない。

また、指導教官は「日本のことを研究しないと就職できない」と博士論文のテーマを、DC2の研究計画で書いた沖縄と米国の軍事戦略の関係から、日米安保条約改定(安保改定)に変えさせた。そこで、米海兵隊の沖縄移転など1950年代の米軍再編が、60年の日米安保条約改定にどうつながったか研究した。

大量の米政府の公文書をもとに海兵隊の沖縄移転の経緯を明らかにした際、東京の学会や研究会では学問的な意義が不明二客観中立的な研究ではないといわれた。学問の意義とは何か。客観中立性とは何か。もし政府に都合の良いことを論じることならば、それは学問なのか。

実際、安保を支持する研究者が安保改定を研究してきた。そのため、安保の負の側面に焦点をあてた研究は少ない。新安保とともに結ばれた日米地位協定の体系的な研究がほぼないことに気づいたのが、博士論文の最大の収穫だった。日本が被占領国から脱却して米国と対等な同盟国になったのが安保改定だと評価されてきた。だが、日本政府は日米地位協定と同時に密かに合意議事録を作成し、占領期の米軍の特権訓練の自由、事件・事故現場での日本側の捜査権放棄などを受け継いだ事実を解明した。

沖縄で研究する意味とは、権力ではなく歴史や事実に対して忠実であることであり、それこそが学問の意義であると信じている。

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

2020.3

No.15



平和の絵—「戦争と平和」

20点連作—第17作

西村計雄 作

神木に包まれた幻のヤマネコたち

300号

176×274×6.5cm



〈制作意図〉 サキシマスオウの巨木が樹立する西表島・古見の三離御嶽。金色の木洩れ日に静かにささやく神さびた森。この自然の聖域に動物たちのやすらぎの世界がある。神々の守護のもと、原始の姿を残しているイリオモテヤマネコや世界最大の蛾・与那国蚕、セマルハコガメたちがたわむれる。このような破壊のない平和な悠久な自然をわれわれはいつまでも守らねばならない。
(昭和59年6月7日寄贈)

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、共和町立西村計雄記念美術館開館。
2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会